

(様式3)

「確かな学力の育成に係る実践的調査研究」
メニュー①－1 学力向上実践研究（小・中学校）
平成22年度委託事業完了報告書
【推進校】

都道府県名	山口県	番号	35
-------	-----	----	----

推進校名	下関市立川中西小学校	研究主題	I・III型
------	------------	------	--------

○ 推進校として実施した研究内容

1 重点課題への取組状況

(1) 1年次（平成20年度）

○ 基礎・基本の見直し

「学習規律」「聞く・話す」「読み・書き・計算」の3本柱で基礎・基本の見直しを行った。特に、健全な学習を進めるためには全校体制で「学習規律」の定着を図り、学校全体がずいぶんと落ち着いた雰囲気の中で授業を進めることができるようになった。

○ 日々の授業の見直し

教材・教具の工夫や発問、ワークシートやノート指導の工夫を進めた。

○ 各種調査やテストの活用

全国学力・学習状況調査、NRT等を実施し本校児童の傾向と課題解決に向けて活用を図った。

(2) 2年次（平成21年度）

○ 教科を国語科の「読むこと」に絞って研究を深めた。

○ 副主題は、2年目に再設定した。

基礎・基本を見直す中で、「大切なことを聞きのがさないこと」や「文意を的確に読み取ること」をもっと育てていく必要を感じ、それに基づいて研究の内容や方法を設定した。

○ 各種調査やテスト類の活用

全国学力・学習状況調査結果、NRT等の他の市販テストや「やまぐち学習支援プログラム」を実施し本校児童の傾向と課題把握、解決に向けての活用を図った。

(3) 3年次（平成22年度）

○ 引き続き、国語科の授業を通して「読むこと」の指導を深めていくことを中心に、「読んだことを文章や発表などで表現すること」、また、読みを深めるために「かかわり合う」「伝え合う」ことを日々の授業の中で取り組み、研究を進めた。

○ 各種調査やテスト類の活用

全国学力・学習状況調査結果、NRT等の他の市販テストや「やまぐち学習支援プログラム」を実施し、本校児童の傾向と課題把握、解決に向けての活用を図った。

2 3年間の成果及び今後の課題

(1) 学習環境の整備

① 「学習の約束」

全教室に「学習の約束」を掲示した。全校体制で取り組むことで効果があった。

1年次、特に効果のあったものは、始めと終わりの号令の改善である。始めと終わりに心を込めた礼を行い、必ずもう一度姿勢を正し、前にいる教師と目を合わせてから次の行動に移るといった約束をしたところ、短期間の間に学習へのけじめ、心構えが児童にも教師にも芽生えてきた。

② 「聞くとき、話すときの約束」

全校で統一し、学年に応じた表現にして各教室に掲示している。特に、最後まで人の話を聞くことを徹底することで、落ち着いた雰囲気の中で集中して学習に取り組むことができるようになった。

③ 学習の足あとや学習の仕方

各学級や学年に応じて、学習の足あとや学習の仕方などを掲示し学習環境の整備に努めた。また、教師の授業への意欲が増し、児童の学習への手助けとなった。

(2) 基礎力を高める

① ノートづくり

学年が変わっても同じ指導や積み重ねができるようノートづくりの共通事項をどの教室にも掲示している。研究当初、算数のノートづくりには力を入れてきたが、途中から川中西小版「めぎせ！伸びるノートづくり」を作成し、国語のノートづくりにも取り組んだ。一人ひとりの学習の足あとを残す学びの基礎づくりとなった。

② 音読カード

3年間工夫を重ねながら音読に継続して取り組み、読みの基礎力を付けた。家庭の協力も不可欠な音読の宿題は6年間毎日続けることになる。音読カードに毎月提示される詩は、児童にとって楽しみとなっている。たくさんのいろいろな詩や読み物にふれる機会を与えることができた。

③ 読書カード・本校の学校チャレンジ目標「年間読書30冊」

チャレンジ目標に達成した児童は、読書カードを持って校長室へ行くと校長から手作りのしおりのプレゼントがあり、校長室前には名前が掲示される。学校全体での取組は、児童の意欲をかき立てることができる。三年間の達成者率はほぼ横ばいではあるが、読書総数は約1.8倍くらいになってきた。読みを楽しむ児童が増えているように思われる。

④ 朝学

「読書・イングリッシュ・視写・漢字・計算」の内容を曜日毎に決め、朝学で取り組んだ。全校が同じ時間に落ち着いて学習の基礎の定着に取り組むことが効果的である。

⑤ 視写

水曜日の朝学は「視写」で、全校で系統的に取り組めるよう市販のプリント集を使用している。語彙や読み、また文章構成の基礎を学ぶ貴重な時間となっている。

(3) 国語科「読むこと」の充実

① 国語の授業の中での実践

「読む力」が身につけば「書いてあることが分かる」、「問題を正確に読むことができる」、「読むことが楽しくなる」、「自分の思いが伝えたい」、「感動が広がる」など様々な力につながる。まずは、子どもたちの実態から「読む力」について「書いてあることが分かる」「問題が正確にわかる」「読むことが楽しくなる」ととらえて出発した。国語の授業の中で、実践をとおして研究を進めてきたことで、全国学力・学習状況調査結果にも数値的に顕著な伸びが見られた（グラフ1参照）。「読み」の基礎を身に付けることは、どの教科にも、また生活の中にも生きてくる。

② 教材解釈・教材分析

「教材解釈」を深めることで、学習全体を見渡し、学ばせたいことや手立てを明確にすることができ、教師自身の授業力向上に大きな力になっている。

③ 大切な言葉に着目

大切なキーワードや文章に着目できることを繰り返し指導するように心がけたため、定着が図られている。

④ かかわり合い、伝え合い

読み取った内容に対する自分の考えを書き、友達とかかわり合い、伝え合う中で自分の読みを確かなものにしていく授業に取り組んでいる。

⑤ 研究、実践のつながり

研究を進めていくと、次第に「板書」や「学習の足あとの掲示」の効果的な方法、さらには「読む楽しさ」を探る研究が実践につながっていき、新たな課題も生まれ、研究を深める足がかりとなった。

(4) 校内研修の充実

① 全校授業

毎年、低・中・高学年それぞれ1回ずつ3回の国語科の全校授業を行い、研修を深めてきた。ワークショップ形式を取り入れることによって研究協議の活性化が図られ、充実感のある研修を進めることができた。

② 一人一授業

国語科で実践をとおした研究になるよう授業を互見し、授業後隣学年ブロックでの検討会を行い、取組を振り返った。

③ 隣学年ブロック研修

授業を互見した後、授業検討や意見交換を行った。短期のPDCAサイクルを構築し、実践をとおした成果と課題を明らかにし、具体的な取組の道筋を検証することができた。それぞれのブロック単位でも、研修への真摯な取組、高まりが見られ、全体とのかかわりも密に、取組の具体的な内容や重点化する内容等について共通理解し、研修が実践的に深められていった。

④ 研修だよりの発行

教職員がいつも同じ土俵で取り組めるよう「研修だより」を発行してきた。研修の足どりの確認をしたり、提案や主任の思いを随時伝える研修の潤滑油としての効果を感じている。

⑤ 校内研修の活性化

全校授業の研究協議会では、ワークショップ形式を取り入れた。活発に意見を出す中で成果や課題をみんなのものとし、明日からの授業に生かしていけるよう努めている。

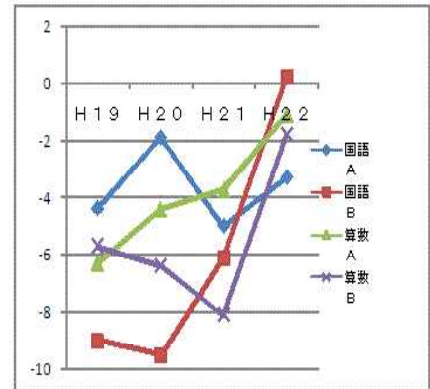
⑥ 指導者から学ぶ

年3回の全校授業に同じ指導者を招聘し研修を深めた。本校の取組の道筋が見えやすく、国語科の指導についても深めることができた。

(5) 全国学力・学習状況調査、やまぐち学習支援プログラム、NRT等の活用

① 客観的に総合的に力を見る

上記のテスト等を実施・分析し、検討する機会をもった。全校的によくなっているところと課題を明らかにし、全校職員で共通理解すると、教師の感じていたことに加えてより客観的かつ総合的に児童の現状を見ることができ、具体的な改善への取組に生かすことができた。



(全国学力・学習状況調査正答率の推移)

② 正答率の推移

右グラフは、全国学力・学習状況調査のここ4年間の正答率の推移である。全領域ともそれぞれ伸びが見られる。特にH21年度から研修の内容を国語科に絞り、読み取りに力を入れてきたためか、国語B領域に関しては+9.2ポイントも上昇が見られた。また、各年度の平均を見てもH19～H22で4.9ポイントの上昇が見られるなど数値的にも手応えとして感じられる結果となった。

③ 「やまぐち学習支援プログラム」の活用

県独自の学習教材として開発された問題であるが、単元終了時に学習内容の習熟を図ったり、補充問題として活用したり、学期末の定着度を見たりするなど3～6年で力を入れて活用している。一学期と二学期の出題の領域が必ずしも同じではないのでデータだけでは判断できないが、学年により学期末の正答率が概ね上がっている。逆に下がったものもあるので、その分析をし、今後の指導に生かしていきたい。

(6) 研究発表会を開催して（3年間の研修を総括して）

研究指定に取り組んだ3年間のまとめの一つとして研究発表会を開催し、国語科の授業公開、研究の取組の説明、授業検討会を行った。授業公開では、児童が学習課題に向かって熱心に取り組む姿を見ることができ、継続して取り組んできた学習規律が身に付いていることを実感することができた。また、大切な言葉や文章に着目して読み取る力の定着にも確かな手応えを感じた。「読む力」をどうとらえ、育てていくか教師側の新たな課題に目を向けることもできた。

研究を始めた頃と比べると、どの児童にも、課題に対して根気強く最後まであきらめずに読み、書く姿が見られるようになった。それが土台になって、児童はより高いレベルの読む力の育成に向かうことができると考える。今後、本校がとらえる「読む力」の修正を図り、再度共通理解していきたいと思う。さらに、言葉に着目するあまり、作品の本質や読む楽しさがどこかに置き去りになってしまうことがありがちであるが、ねらいはどこにあるのか、ねらいに向かってどの活動を仕組むのかを見極めながら、児童の力を向上させていかななくてはならないと感じている。本校職員が一丸となって全校体制で取り組んできたこの風土は、成果として根付いてきている。研究会のもち方においても、ワークショップ形式での協議会に参加者全員から具体的な手立てまで幅広く多くの意見を交換することができ、手応えを感じている。今後ともさらなる定着・深化・発展に向けての研鑽の決意を新たにしている。

基礎・基本に目を向け、児童の学力アップと教師力アップにつながることを模索しながら、実際に取り組んできた内容は、特別な手法を導入したものではなく、日々当たり前のことを、できることから少しずつ当たり前にやっけていこうと取り組んできたものである。成果を手応えとして感じられるようになって思うことは、全校体制で統一し、一丸となって継続していくことがいかに大切であるかということである。ともに川中西小学校の大切な児童を育てていくという基本にあってこそその研究であり、それが、児童にとって学力の向上が基盤となって「学びの楽しさ」を実感させ、「自己実現の原動力」、さらには「生きる力」につながっていると考える。

最後に、このような研修の機会を与えていただき、文部科学省はじめ関係教育委員会、指導者の皆様方にこの場を借りて厚くお礼申し上げます。

